

教育研究所だより

令和8年9月3日 NO.118



「使ってはいけない財布の中身」

教育部長 中川 謙二

バブル期の終わりを大学生として過ごしていた僕は、たまに京都の繁華街へ飲みに出かけた。カラオケと雑談で盛り上がり、気づけば日付が変わっていることもしばしばだった。終電を逃した僕は、仕方なく互いの財布の中身をかき集め、タクシーで帰ることにした。しかし、どうしても足りない。「この金額で、行けるところまでお願いします」と運転手に頼みこみ、なんとか逢坂山を越えたものの、結局は西武デパート（旧）の手前で降ろされた。静まり返った深夜の車道をひたすら歩きながら、「ホンマ、アホやな」と笑い飛ばした。しかし、その時、僕は知らなかった。財布の中身は飲み代に全部使ってはいけないこと、「使ってはいけない財布の中身」があることを。

「実践」は「労働」

「もう一コース増やせないかな？」「劇にして、子どもたちから発信させては？」「学習を深めるためには、もうワンステップ足りない」一人権学習や校外学習、学校行事などの企画会議では、子どもたちや保護者のためを思った積極的な意見が飛び交う。そこで異を唱えるには、「水を差す」「後ろ向きの発言」との批判を覚悟しなければならない。

しかし、選択コースを増やすこと、創作劇にすること、新たな取組を加えることは、必ず誰かの時間と労力を必要とする。それを無視して実施すれば、たとえ自分や家族が病に倒れても休めないような、過酷な状況を生み

出してしまう。全職員とその家族が健康で平穩である——そんなありえない前提の上に成り立つ「豊かな実践」は、「過酷な労働」と表裏一体ではないか。それは「使ってはいけない財布の中身」に手を出すことではないかと、僕は思う。

“あなた”に

深みや豊かさを備えた教育実践や教育研究を推奨する本紙の冒頭で、こんな湿っぽい話題を取り上げるのは、「心ある教員」を失いたくないからだ。市内校園に勤める方々の中には、「タイパ」「コスパ」に敏感で、与えられた権利を使い、ワークライフバランスをうまく取れる人もいる。そういう人は心配していない。

一方で、「こんなにのんびりしていて大丈夫だろうか」と、休日にさえ職場に顔を出したり、パソコンを開いたりしてしまう人。そして、こんな拙稿にさえ目を通してしまう生真面目な“あなた”。そういう“あなた”が心配なのだ。

そんな“あなた”に、これからも教育・保育に携わってほしいと心から願う。そのために、“あなた”の手元にある時間と労力を、教育・保育のためだけに使い果たさないでほしい。家族や“あなた”自身の平穩な日常と未来のための取り分、「使ってはいけない財布の中身」として残しつつ、これからの教育・保育を担ってほしい。



「保育っておもしろい！」

幼児課 参事 辰 巳 文 子

園見学に行った際、タイミングを見て子どもに声を掛けると、人懐っこく笑顔や言葉を返してくれたり、そのやりとりを近くで見ていて次第に輪に入ってきたり、遠くから様子を見ていたり、全く気に留めずに遊びに夢中になっていたり、本当にそれぞれの子どもの姿があって、十人十色を感じます。

初めて会った私に「ぼく、ふたごやで。」「飛行機で中国行った。」等プライベートを教えてくれる子に出会うと、「伝えたくて仕方がない」という湧き上がる気持ちが伝わってきます。「へー、そうなんや。」と答えると、双子の子はきょうだいを紹介してくれ、中国に行った子は、その友達が「〇〇ちゃんのお母さんは中国人なんやで。」と教えてくれました。

先生に抱っこしてもらっていたある子は、大好きな歌が聴こえるときゆつと体を動かして、うれしい気持ちを表現してくれました。(歌と言っても私の生歌だったので、その時の気持ちは“うれしい”ではなかったかもしれませんが。)そして、園の職員と訪問看護の方が、この子の医療的ケアや保育につながる様々なことについて話し合っている様子も見せていただき、「子どもをみんなで見守っていく」ことを実感しました。

市外になりますが別の園では、血糖の管理が必要な子どもに、昼食前にインスリンを打つ様子を見せていただきました。驚いたことには、子ども達が向かい合って給食の準備をしているその席で、園の看護師がケアをしていました。「別の場所で打つのかと思っていました。」と言うと、看護師さんが「いいえ、もう、

この席で。〇〇ちゃんも大きくなってきたので、できる部分は自分でもしてもらいながら。」と答えてくださいました。同じ席の友だちも「何してるの?」と言うことなく、おしゃべりしたり給食の準備をしたりしていました。この時私は、自分が「〇〇ちゃん+医療的ケア」と考えていたことに気づかされました。医療的ケアに限りませんが、支援や配慮等はその子に引っ付いているものではなく、それを含んでの「〇〇ちゃん」であり、このことは、一緒に園で過ごしている子どもたちにとっては、「そうやで。知ってるでー。」という感覚なのかもしれません。

改めて考えてみると、園の保育の場が、いかに多様性に満ちているかがわかります。その中で、交じり合ってもまれ合って育っていく子どもたちは、交じり合わずもまれ合わなかった人生よりは、きっと豊かな人間に成長すると思います。

そして、多様性に満ちた場が排除や偏見の方向に向かないよう、自分の人権感覚を磨き、子どもの感性を借りながら、先生として子どもと一緒に生活していくのが保育者だと思います。保育って本当におもしろい。そして深い!

先生自身が保育教育を「おもしろい」と感じる事が、子ども達の園・学校生活の充実につながると思います。先日ある園の新任保育士さんに「どう?慣れた?」と聞くと「楽しいです!」と返してくれました。キラキラしたこの先生の姿を見て、力が湧いてきました。保育も教育も決していることばかりではないと思いますが、大人も“交じり合ってもまれ合って”日々成長していきましょう。



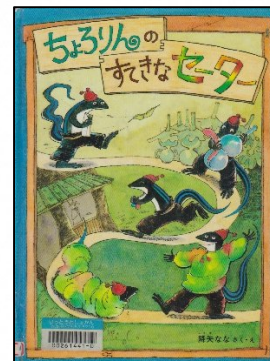
図書館司書より先生にすすめたい一冊

『ちょろりんのすてきなセーター』

降矢なな／さく・え 福音館書店

ちょろりんは寒がりやのとかげの子。暖かいセーターを買うため、祖父の仕事に懸命に手伝い、もらったお小遣いで急いでお店に行きますが…。目的のために何ができるかを考え、実現のために努力する子ども。その姿に胸を打たれ、時に手を差し伸べてくれる周囲の優しさにも心温まる絵本です。

《図書館 小島美紅》



『勇気を出して、はじめの一步』

本田有明／作 小峰書店

僕と同じ「ケント」という名前の子が転校してきた。彼は僕と違って何でも出来る完璧な子。でもひとつだけ苦手なことがあるみたいで…。それぞれの得意なこと、苦手なことがあるなかで、互いに助け合い、新たな一步を踏み出します。一人では出来ないことも誰かの存在が背中を押すきっかけとなることを教えてくれます。

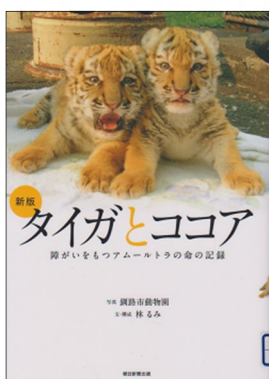
《図書館 新庄純佳》

『「コーダ」のぼくが見る世界』

五十嵐大／著 紀伊国屋書店

耳が聴こえない親のもとに育った、聴こえる子どもたちを指す言葉、コーダ。ろうの両親のもとで育った著者が、コーダを理解してもらうため、家族とのやりとりや自身の経験を交えながら語ります。家族の中で、著者だけが耳が聴こえる中、「ふつう」とは何なのか。それぞれの「ふつう」が異なる中で、知ることの大切さを教えてくれます。

《図書館 南川香乃》



『タイガとココア』

林るみ／文・構成 朝日新聞出版

釧路市動物園に生まれたアムールトラのタイガとココアは、後ろ足に障害があった。長く生きられるかわからない中、園では2匹を育てていくことを決断する。命を助けるということはその子の一生に責任を持つということであり、軽い気持ちでできることではない。そんな命の尊さを教えてくれます。

《図書館 宗貞瞳》



『しなやかな心と体を育てる保育を ～心ときめかせ、しなやかに生きる子どもの育成～』

栗東市立金勝第2保育園

今年度から、金勝こども園、金勝小学校とともに『しなやかさ』を共通のキーワードにして金勝学区の子どもを育てています。子どもを中心に据えて、園での体験や学びを小学校につなげていく接続を意識して取り組んでいます。

その中で、園内研究テーマを『わくわくドキドキ心動かす体験を通して育む心と体～やってみよう!みてみてきて それいいね!』と設定し、日々保育をすすめています。

「やってみよう」と心を動かす土台として、まず朝に心と体と脳をしっかり目覚めさせたいと考え、毎朝、3～5歳児の子どもたちが遊戯室に集まり、リズム遊びをしています。毎日の積み重ねで見通しをもち、朝から気持ちよく一日をスタートできるようになっています。また、異年齢でリズム遊びをすることで、友達の姿に気づいて「すごいね!」と憧れの気持ちを持ち、大きく体を動かしたり手先の動きまで意識しながら走ったりする姿が見られます。

また、自然豊かな園環境を活かして、自然物などいろいろな素材を使いながら子どもも保育者も一緒になって試したり工夫したりすることを大切にしています。したいことを十分に楽しみ、気づいたことを友達や保育者に伝え、お互いの良さを認め合える心も体もしなやかな子どもたちを育てていきたいです。



「子どもが輝く学校づくり研究推進事業」の取組

～子どもたちの声、思いや願いが反映される学校づくりを～

栗東市立大宝小学校

本校では、校内研究テーマを「豊かにつながり自他の価値を見出す子どもの育成」とし、自己理解や他者理解を促す「つなぎ」を日常的に取り組み、授業で子ども同士が関わる姿や自他の価値を見出すことにつながる支援について研究を進めています。

そして、この事業を受けて2年目となる今年度は、「子どもたちが主体の授業づくり」「学びを支え合う集団づくり」「協働して取り組む学校づくり」の3つの視点から、子ども自身が学校を創る主体者としていきいきと輝く学校づくりを目指しています。児童会活動を中心に、子どもの意見を集め、子どもの声を取組に反映させることで子どもの学校、学級への所属感と満足度を高めていきたいと思っています。



【つなぎ】…安心して発言できる関係づくり・友だちとの横のつながりづくり・安心して居場所づくり

【授業づくり】…子ども主体で協働的な学習活動を取り入れた授業実践

【児童会活動】…代表委員会を中心に、子どもたちの声が学校づくりに反映される仕組みづくり